佳作　別れは終わりではなく、愛のかたちを変えるだけ

サルワ　アウラ　ディエン　カルヤ
SALWA AURA DIEN KALYA
国　　籍　インドネシア
職　　種　ビルクリーニング
実習実施者　株式会社ビークルーエッセ
監 理 団 体　広昌会協同組合

私は家族の中で長女として生まれました。幼い頃から、私の人生には本来よりも早く多くの責任が訪れていました。まだ小さい頃に、父が亡くなりました。そのとき私は、まだ「別れ」の意味をはっきり理解していませんでしたが、大切な何かが失われたことを感じていました。その頃、妹はまだ赤ちゃんでした。何が起きているのかも分からない年齢でした。母は私たちにとって唯一頼れる存在になりました。私はまだ子どもでしたが、自分のためだけでなく、母や妹のためにも強くならなければならないと感じ始めました。

父が亡くなった後の毎日はとても大変でした。母が一人で家事をし、赤ちゃんの妹の世話をしながら、私たちの生活を支えている姿を見ていました。私もできることを手伝い始めましたが、まだ自分自身も助けが必要な年齢でした。

それでも少しずつ、家族のために役に立ちたいと思うようになりました。

数年後、母は再婚しました。最初は戸惑いや不安もありましたが、母の気持ちを理解しようと努めました。新しい父は私たちに優しく接し、少しずつ信頼できる存在になっていきました。その後、弟や妹たちも生まれ、家族はにぎやかになりました。私は長女としての責任がさらに大きくなり、弟や妹たちの支えになることが当たり前になっていきました。そして私は、日本へ行くという大きなチャンスをつかみ、より良い未来を目指すことになりました。日本では、生活や自立、そして努力することの大切さを学びました。

しかしその最中、再び悲しい知らせが届きました。継父が亡くなったのです。まるで時間が止まったように感じました。しかし遠く離れていたため、すぐに帰国することはできませんでした。罪悪感や悲しみ、そして喪失感が一度に押し寄せました。

私は二度目の「父との別れ」を経験することになりました。

彼は私の心の中で大きな存在となり、家族の空白を埋めてくれていました。その思い出は、今では大切であると同時につらいものでもあります。私はただ涙をこらえることしかできませんでした。母が再び悲しみに直面しているそばにいてあげることも、弟や妹を抱きしめることもできませんでした。そのとき、心から「遠くにいる」ということの意味を感じました。しかしその悲しみの中で、私は立ち止まってはいけないと気づきました。家族のために、強くあり続けなければなりません。今、私は自分の人生が多くの別れと責任によって形作られてきたことを理解しています。そして、愛は長い時間だけではなく、短い時間でも深い痕を残すことを学びました。長女として、私は母を誇りに思ってもらえるように、弟や妹を守り、頼られる存在でありたいです。これからも希望を持って前に進み続けます。多くのものを失ったとしても、未来へ進む目標だけは失わずに生きていきます。